

「バットを身体から離すことだ。清水はバットが身体に巻きついている。あれでは打てない。コンパクトに振るとは、バットを身体から離すことだ」——

昨年だったか、一昨年だったか TV で巨人戦を見ていたときの解説者落合博満の言である。ベラベラ喋るだけが能のアナウンサーには理解できなかった。バットを離して打てるか、との質問に落合はにやにやして答えなかった。

打者のバットが自在に働いて球を打つ瞬間は、打者が見えない。バットと球しか見えない。バットが自在に働いて球を打つからである。観るものは茫然として、あるいは感嘆して球の行方に心を奪われるだけだ。一方、バットが身体に巻きついて三振する場合は、惨めな打者だけが見える。

「思うに散文に気をとられている時には歌は成らず。さればとて、散文の方の悟入もせざれば、やはり歌の上達はおぼつかかなかるべし」——と茂吉は言った（斎藤茂吉日記。大正 15 年 8 月 22 日）。散文と短歌は次元が違う。散文には、記述や報告や説明や判断があってもいいが、短歌は一首 31 文字だから、そんなことしている暇が無い。たとえ 1 箇所でも説明や記述があつたりしたら、一首は短歌の体をなさなくなり、散文化してしまう。ああそう、それがどうした、となって、万事休すである。心のなかの気分や感情を如何に読む側に伝えるか、それには如何に散文から離れ~~れ~~かが、短歌制作の根本である。散文と言う言葉の宝庫に浸りながら、ここから抜け出して自在になったときに真の短歌は生まれる。

「夢殿の救世観音を観ていると、その作者と言うような事は全く浮かんでこない。それは作者というものからそれが完全に遊離した存在になっているからで、これは又格別なことである。文芸の上で若し私にそんな仕事でも出来ることがあつたら、私は勿論それに自分の名などを冠せようとは思わないだろう」——と志賀直哉はいった（昭和 3 年、創作集序言）。

「バットと短歌と彫刻と小説との間には、離す・離れると言う共通項がある。それなら、絵画の場合はどうか」——と新井俊郎は考えた。

九州久留米の石橋美術館には、久留米生まれの画家坂本繁二郎の遺作が数多くある。私は故あって、昭和 48 年から 10 余年ほど毎月久留米へ行く用事があつた。行けば必ず美術館をたづねた。ここで、たまたま『放牧二馬』に出会った。このとき「神々しいな」と思った。直哉のいった「作者から遊離した澄み切った貴い作品」だった。これに比べると、ピカソは見せたがりやで、ピカソと言う作者が見えすぎて到底、坂本さんには及ばないなと思った。『放牧三馬』も良いが『二馬』は更にいい。 —2003・4・21—